

8

自己免疫疾患における自己抗原としての
70kD熱ショック蛋白の研究

(内科学第三)

○坪井紀興・楠 芳恵・竹越 亨,
久保隆之・太原恒一郎・高梨博之,
殿塚典彦・林 徹・伊藤久雄

[目的]70kD熱ショック蛋白(70kD heat shock protein:hsp70)は、heat shock等のストレス刺激により強く誘導される蛋白である。細胞生物学的には、ストレス環境下で生じた変性蛋白の除去に加えて、多くのペプチドや蛋白の高次構造形成あるいは、その輸送を介助するmolecular chaperoneとしての役割を果たしている。このhsp70の自己免疫疾患における自己抗原としての病的意義は明らかにされていない。今回我々は自己免疫疾患患者血清中のhsp70に対する自己抗体の検討を行った。

[方法]慢性関節リウマチ(RA)、全身性エリテマトーデス(SLE)、進行性全身硬化症(PSS)、シェーグレン症候群(SjS)および健康人(HC)の血清中抗hsp70抗体をImmunoblotting法により検討した。さらに抗セントロメア抗体陽性患者群についても同様の検討を行った。抗原はHela細胞よりATP affinity chromatographyを用いて、精製したヒトhsp70を使用した。

[結果]血清中抗hsp70抗体陽性率は、RA2/50(4.0%)、SLE1/50(2.0%)、PSS1/17(6.0%)、SjS6/43(14.0%)、HC1/50(2.0%)といずれも低率であった。患者群の臨床的背景を検討すると、SjS抗hsp70抗体陽性患者6名中5名が抗セントロメア抗体陽性であった。抗セントロメア抗体陽性患者群での検討したところ、抗hsp70抗体陽性率12/25(48.0%)と非常に高率であるということを見出した。

[結語]自己免疫疾患患者血清中の抗hsp70抗体をImmunoblotting法により検索し、抗セントロメア抗体陽性患者において高率に抗hsp70抗体を見出した。抗hsp70抗体と抗セントロメア抗体の出現に関連性が示唆され、hsp70が自己抗原として何らかの病的役割を果たしている可能性が考えられた。

9

桐沢型ぶどう膜炎44例の臨床的検討

(眼科学) ○松澤 豪、市側稔博、箕田 宏、
山内康行、坂井潤一、臼井正彦

[目的] 桐沢型ぶどう膜炎(KU)は健康人に突発する予後不良の疾患で、水痘・帯状疱疹ウイルス(VZV)や単純ヘルペスウイルス(HSV)の眼内感染によって発症するとされている。今回我々はKU44例50眼についてその病像や治療法、予後につき検討し、さらに病因ウイルスによる差異についても考察を加えた。対象および方法 対象は、1983年から1985年2月までに東京医科大学病院ぶどう膜炎外来を受診したKUの44例50眼で、病因検索には、抗体率、蛍光抗体法およびPCR法を用いた。年齢、性、罹患眼、および臨床所見につき起因ウイルスによる差異を検討し、またツベルクリン反応およびVZV皮内反応により細胞性免疫能を検索、加えてKUにおける疾患感受性としてHLA抗原の検索を施行した。

結果 病因はVZVに起因したKU(VZV-KU)が31例37眼で、HSV(HSV-KU)は13例13眼であった。罹患年齢はVZV-KUで有意に高齢で、男女比はVZV-KUとHSV-KUで20:11と5:8であった。罹患眼はVZV-KUで片眼性25例、両眼性6例、HSV-KUで13例全例片眼性であった。豚脂様角膜後面沈着物、網膜動脈壁への浸潤、全周に広がる滲出斑および網膜剥離はVZV-KUでHSV-KUに比較し有意に多かった。ツベルクリン反応はKUにおいて有意に陽性率が低いことが判明した。VZV皮内反応を検索し得たVZV-KU19例では、陰性者が6例、偽陽性者が5例みられ、発症初期におけるVZVに対する細胞性免疫能の低下が示唆された。HLA抗原は日本人健康者に比してAw33、B44を有している者が多く、A24が少なかった。

結論 KUでは原因ウイルスによって病状に差異がみられ、内因として宿主の細胞性免疫応答の低下ならびに遺伝的素因に基づく疾患感受性があることも再確認された。